

ハイエク『隷属への道』再考
——思想の受容と展開からのアプローチ

吉野 裕介

(京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員)

2012 年 11 月



京都大学グローバル COE

「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科

Email: intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp URL: <http://www.gcoe-intimacy.jp/>

Abstract

1944年にイギリスで刊行されたフリードリッヒ・ハイエク(Friedrich Hayek, 1899-1992)の『隷属への道』(The Road to Serfdom, 以下RSと略記)は、かれの著作のうちこれまでに最も売れた本のひとつである。本稿では、この書物をめぐるハイエク思想の受容と普及の問題について、以下の次の二つの問題に接近する。ひとつはハイエク体系におけるRSの位置付け、ふたつめはRSが支持を得る過程でのマハループの役割である。本稿の考察を、以下のように進めていく。IIではRSの内容を追いつつ、その成立過程を明らかにする。具体的には、小論「ナチ社会主義」(1933年)、パンフレット「自由と経済体制」(1939年)、大著『自由の条件』(1960年)と『法と立法と自由』(1973, 76, 79年)といったかれの前後の仕事との関わりから、RSの位置付けを明らかにする。IIIではRSの成立事情を検討する。両者の手紙のやり取りからそこでのマハループの貢献を明らかにしつつ、アメリカで出版に至るまでの過程を追う。IVではRSの出版後の影響を吟味する。RSはアメリカでどう受け止められたかについて吟味する。これにより、アメリカにおけるハイエク思想の受容と発展や、のちのハイエクの活動のなかでのRSの位置付けについて論じる。最後にVで結語としてこれまでの考察を概括してRSの意義を再考し、本稿の結論とする。

キーワード：ハイエク、『隷属への道』、マハループ、アメリカ、自由主義、保守主義、リベラル

2011 年度次世代研究「東アジア諸国におけるハイエクを中心とした新自由主義の受容と展開」（研究代表：吉野裕介）による成果である。

【メンバー】（）内は 2011 年度プロジェクト時点

吉野 裕介 （京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員）